

上島の文芸

水曜会【弓削】

みめ良きも二つ三つ秋茄子もぐ

炎天の旅きつかりしこと憶ふ

そこが欠けこが欠けつつ踊りをり

帰りゆきたる子等浮環そのまに

代参の姪と話して盃蘭盆会

帰省して逝きし二人の墓参り

初嵐守宮落ちたる音らしき

亀島 一美

小林しぐれ

田坂 紫苑

田坂美代子

中本砂恵子

中脇 幸造

森本 恵子

生名短歌会【生名】

一輪の桔梗叢似咲き残り八月三十日音なく昏るる

夢は夢時代は時代今日は今日テーブル囲みひ孫と遊ぶ

この夏はなぜか数減る蟬の声天変地異の予兆かと怯ゆ

夏草の引けども生える青じゅうたん草食む牛のおれ

世の中に絶対なんてないんだと思ひ知らさる原発の

事故

夫逝きて早も百箇日送り盆つくづく恋しと啼く法師蟬

渡辺スズ子

池本 滝子

浜田伊勢子

我が家にもグリーンカーテン朝顔は花咲き競い今朝二十咲く

野の花が世界に咲けりナデシコジャパン津波禍の日本に灯りを点す

大正十三年築の小樽運河われと同年ゆるりと歩く

むつみ歌会【岩城】

道の辺にしろじろ咲きける葦の花あしたの風に小さく揺るる

わが部屋の窓より見ゆる百日紅ピンクさわさわ風に揺れるる

思深き年嵩の叔母二人在り先には逝けぬと八十路を息む

帰ること告ぐれば母は「どうして」と病床にありて淋しげに問ふ

雨上がり父から継ぎし菰隠の畑に残れる数本の鍬

北海道バスの旅して一日中走れど走れど人車は見えず

若き等に味噌を搗く術伝へをり昔の我が身に重なりて見ゆ

父母在さぬ島に渡りて淋しくも故郷の山われに優しき

魚島俳歌柳会【魚島】

テンテコのダイバに怖れ逃げし曾孫今年先立ち踊りあるなり

弟の墓に院号彫り込んで

岡野三重子
池田 友幸

浪本 綾子
宮本佳世子

池田 繁雄
森本 和佳

高本 雅雄
白石 勇

西本 優子
池本 正子

三上 運

故郷は離れたくないいつまでも句会への出席も毫け防止かな

ほどほどに花を持たせる老いの知恵
善人の仮面かぶりて肩が凝り

いさぎよく退いて余生を恩返し
今はもう友の訃報も驚かず

踊子を誘ふレコード鳴り弾み
磯々を回り供養の念仏を

海からの虹が立ってる終戦日
蟬の鳴声聞かぬまま秋立ちぬ

大船 近義
佐伯 真柳
城山 登

柳 小福
松原 瑞峰

第十四回俳句甲子園 全国高等学校俳句選手権大会

《入選》

◎扇風機あと五度こつち向いてくれ

弓削高等学校 蓼原 彰吾

8/20~21 弓削高校 俳句甲子園 全国大会出場

8月20日・21日、松山市において、第14回俳句甲子園全国大会が開催され、弓削高校Aチームが出場しました。
弓削高校Aチームは予選で、仙台白百合学園高等学校、熊本信愛女学院高等学校と対戦、惜しくも決勝トーナメント進出はなりませんでしたが、生徒のみなさんの今後益々のご活躍を期待しております。



かみじま歴史探訪

シリーズ・史料が物語る郷土の歴史⑦

株式会社誕生



上島町に誕生した最初の株式会社は、「永全会社」と推測されます。会社結成の「緒言」（明治十六年三月付）は次のようです。

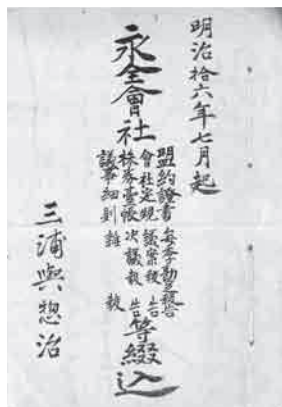
：永全会社ナルモノハ永久活計ヲ安全ナラシムルヲ目的トシ：協力同心シテ、万世不朽ナル道德主義ノ一大会社ヲ結ブモノ也（中略）、世間、方今、流布セル銀行又ハ会社等ノ如ク、単ニ当時ノ利益ノミヲ計ルモノトハ其ノ趣ヲ異ニセリ：

発起人 伊予國越智郡岩城村 三浦与惣治
白石八左衛門
同 同 三浦慎平
同 同 木原新十郎
同 同村寄留 村上寛治

また「永全会社創立盟約証書」（明治十六年七月一日付）には次のように記されています。

第二条、：本店ハ岩城村ノ内へ設置スルモノニシテ、支店ハ会社隆盛ニシタガイ、総会の決議ニオイト便宜ノ地ニ開設：

第三条、：創立ノ際ニハ壹株ニ付、金三百円也：
第四条、当会社の永続期限ハ明治十六年七月ヨリ起リテ天地ト共ニ窮（キワマ）リ無カルベシ：
第七条、当会社々員権ハ該社員ノ跡ヲ継ギタル：相続人等ハ、順次此ノ権ヲ譲リ：其ノ他ノ者ヘ売買・書入・質入ハ勿論、譲与ヲ許サザルベシ



同じ明治十六年七月一日付で取り決められた「永全会社定規」には、四十七ヶ条の条文が見られます。また「永全会社株券白帳」には、三浦与惣

治（三株）のほかに、岩城村の株主は二十五人（各一株）。生名村には村上寛治を筆頭に八人（各一株）。現上島町の住民以外では、備後（現広島県福山市）の鞆町や越智郡大新田村（現今治市）の住民もいます。

明治十七年一月付の「第一回實際勘定報告」（明治十六年七月一日）同年十二月三十一日）は次のようです。

資本金 壹万式百円
貸金高 九千三拾五円八錢八厘
六ヶ月間益金高 壹千四拾五円八拾貳錢貳厘
資産増殖高 五百七円七拾五錢六厘

同年五月二十日開催の臨時総会の決議報告には、「本年一月、本社宅地購求シ、時ヲ得テ本社建築営業隆盛ヲ期ス」と社長が報告しています。

その後、第二回實際勘定報告会（明治十七年七月二十五日）、第三回（明治十八年一月二十四日）、第四回（明治十八年七月二十八日）と報告会が定期的に実施されています。翌年の「雑報（役員異動）」（明治十九年八月二十日付）は次のようです。

依満期解社長 三浦与惣治
依公選轉社長 三浦慎平
依満期解取締役 稲本幸次郎
不在ニ付解取締役 村上寛治
依公選任取締役 三浦伊左エ門
同 大浦嘉十郎
同 稲本林蔵

その後も「緒言」に明記されていたように「道德主義ノ一大会社」を目指し、「方今、流布セル銀行」に組織替えされることはなかったのでしょうか。一方、この永全会社の株主や取締役には、弓削出身者が一人もありません。まだ、松山藩（岩城・生名）と今治藩（弓削・魚島）の垣根が高かったのでしょうか。

先の役員異動で取締役を「不在ニ付解任」された村上寛治（生名村）は、明治十九年三月に愛媛県会議員に再任されています。天保十四年に、生名村の庄屋の家に誕生、庄屋見習いから庄屋、村長に就任、県議にも数回当選し、東予地域の実業界でも活躍したことが履歴書からうかがえます。

明治二十九年九月 本社支配人ニ採用（今治綿布

会社）

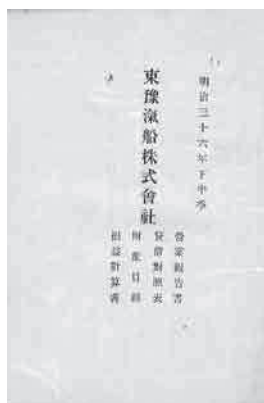
明治三十一年九月 東予汽船株式会社専務取締役 この東予汽船株式会社に關して、明治三十年に発行された同社の「仮株式券状」には社長三浦与惣治・取締役武田靖三郎・村上寛治・藤本久太郎・村上熊太郎とあります。「仮株式券状」という名称からすると、この東予汽船株式会社の発足に、岩城の三浦与惣治や生名の村上寛治が大きくかわっていたことが推測されます。

また、村上寛治の生涯をたえた生名八幡神社（五穀山）の碑文にも「東予汽船亦其遺績」と刻まれています。東予汽船株式会社は、芸予諸島をつないで今治・尾道間を往復する航路が中心でした。明治三十六年の下半期（第十二回）の同社の報告書は次のようです。

運航船舶 西淡路丸・第二東予丸・阿津丸
資本金四万円 借入金二万二千元
役員 専務取締役 石原実太郎
取締役 内海直次郎・村上紋四郎・芥川庫太郎・村上俊三（生名、筆者）

株主は百七十一人、株数は二千株で、当時の今治町を中心に越智郡下や尾道市ほかの広島県下、大阪市の在住者等です。

一方、弓削島には、幕末から進んでいた地場産業に、明治三十一年「弓削石灰合資会社」が誕生しています。また田坂初太郎（一八五一〜一九二一）は「日本ペイント」の創業者として著名、濱根岸太郎（一八六一〜一九二四）は海運界で活躍し、尾道造船の社長にも就任しています（『弓削町誌』）。新時代を切り開いていったのです。



弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授
上島町文化財保護審議会顧問 村上 貢 稿